

第5学年「サッカー」の実践を通して

日野町立根雨小学校 恵比奈 宏志

1 はじめに

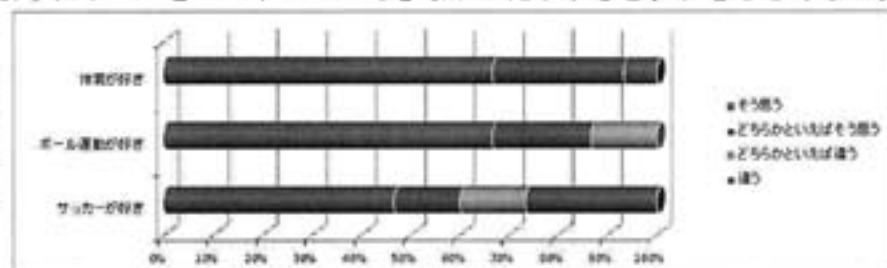
(1) 運動の持つ特性

○サッカーは主に足でボールを扱い、パスやドリブル、シュートなどの技能を生かして得点を競うスポーツである。足でボールを扱うため、手で扱うよりもボールをコントロールすることは難しい。しかし、足でボールを扱うことの楽しさや、シュートが決まったときの喜びは、サッカーならではのものがある。

○サッカーは2つのチームが攻守入り交じり、足を使ったパスやドリブルなどで相手の守りをかわしてボールを運び、シュートして得点を競い合う運動である。攻守の切り替えが速く、運動量を確保することができる。

(2) 児童の実態

本校の5年生は、明るく何事にも前向きに活動する児童が多い。体育の学習においても意欲的であり、個人的なスキルを高めたいと積極的に取り組むことができる。また、ボール運動も楽しみにして、意欲的に活動する児童が多い。しかし、サッカーに慣れていないため、ボールを怖がり、苦手意識を持っている児童が見られ、ゲームに消極的になる児童もいる。また、自分のところになかなかパスがまわってこなかったり、思うようにボールをコントロールできなかったりすると、おもしろくない、難しいと敬遠してしまう児童もいる。事前のアンケート結果では、他のボール運動に比べてサッカーが好きでない児童が三分の一以上であった。



(3) 指導にあたって

サッカーが好きではない理由として、うまくボールが扱えないことと個人技中心になってしまうことがあったので、ボールを思ったところへ蹴る力と止める力の向上を図り、パスを回すことで楽しさを味わうことができるように考えた。その際、児童の実態を考慮し、インサイドキックやインステップキックといった高度なキックに重点を置くのではなく、軸足を蹴る方に向け、ボールの中心をキックすることに重きを置いた。また、プレッシャーがかかるとむやみにボールを蹴ることが考えられるので、プレッシャーのかからない状態でのパスゲームから徐々にプレッシャーのかかるパスゲームへと移行するよう計画を立てた。スローインの指導も行ったが、頭の後ろから両手で投げると受け手がパスを受けにくいので、下から転がしても良いこととした。

昨年度まで研究していたフラッグフットボールにおいて、ボールを持たない時の動きやスペースを使う動きをサッカーでも活用するため、「オン・ザ・ボール」と「オフ・ザ・ボール」の2つを分けて考え、「オフ・ザ・ボール」では、ディフェンスとの距離や角度を考えながらフリーになること、「オン・ザ・ボール」では、フリーの見方や空間を見つけてドリブルやパスができるようにさせた。このことは、他のゴール型のゲームでも生かせる技術であると考えた。

本校はサッカーが専門の体育専科教員が配置されており、体育の授業が常にTTで行えるという恵まれた環境にある。体育専科教員と連携を取りながら、専門的な技術指導やドリルゲーム、タスクゲームの評価を行い、改善することで効果的な指導を行うことができた。

授業後の評価では、ふり返りボードを活用したチームによる話し言葉での言語活動とふり返りカードによる書き言葉や図による言語活動を行った。

2 実践について

(1) 単元目標

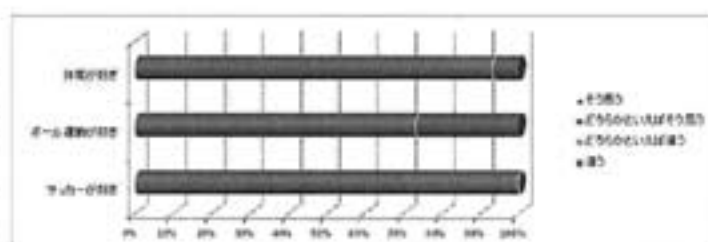
関心・意欲・態度	運動に進んで取り組み、ルールを守り助け合って運動をしたり、場や用具の安全に気を配ったりすることができる。
思考・判断	ルールを工夫したり、自分のチームの特徴に応じた作戦を立てたりすることができる。
運動の技能	簡易化されたゲームで、ボール操作やボールを受けるための動きによって、攻防をすることができる。

(2) 単元の計画

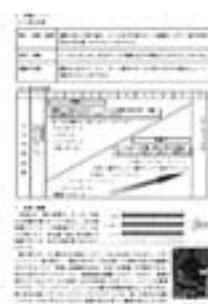
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
主 な 学 習 活 動	・・・ たオ目 めリ標 しエ設 のン定 ゲー ーム シ ョ ン	活動1		○課題をより確かなものにし、いろいろな練習方法を知り、基礎的な技能を身に付ける。(わかる・できる) ・ボールに慣れる (ボールコントロール) ・ドリブルゲーム ・パスゲーム ・シュートゲーム ・3対1ゲーム 活動2 ○チームにあった作戦、相手を考えた作戦を考え、ゲームに活かす (活かす・挑戦する) ・5対5 (ラッキーパーソン) ・5対5 (縦グリッド、横グリッド、斜めグリッド) ・3対2 ・スペースパス ・ラッキーゾーンコート ・アシストゲーム ・関所パスゲーム							

3 成果と課題

本単元の一歩の成果は、サッカーが好きな児童が増えたことである。これは毎時間のアンケートや授業のアンケートからも明らかで、単元終了後も男女問わず校庭でサッカーをする姿が見られるようになった。



振り返りカードに書かれた内容について、「みんなが見つけたポイントやコツ」として、拡大表示し、発表させたり、それを使って本時のめあてを確認させたりすることで、児童に必要感が生まれ、めあてを意識した学習ができた。単元の前半ではドリブルゲームで、記録達成を課題とするゲームを行い、意欲を高めるとともに、ゲームで必要とされる足を使ったボールコントロールの練習、ドリブル、パス、トラップ、シュートなど個々の技能を高めることができた。特に単元を通して行ったトライアングルパスゲームでは、狙った相手に正確にパスをすることができるようになり、技能の向上に伴って意欲も向上した。また、タスクゲームで数的優位な状況でパス&ゴールを意識させ、ワン・ツーパスやサイト



効であるか確かめさせることで、ゲームの中に生じる戦術的課題とその解決策を考えることができ、チームでの作戦の立案やルール工夫ができた。単元を通して少しずつプレッシャーのかかる場面を設定することで、主ゲームの視野の拡大につながった。ゲーム中、味方にコーチングをする児童もあり、戦局を考えたプレーができるようになった。

フィールドとルールの工夫について、足を使ったボールコントロールの技能を高めるため、1m×2mのミニゴールを作成し、キーパー無しで行った。ミニゴールを使うことで、シュートが浮かなくなり、顔にボールが当たることへの恐怖感が無くなった。また、全員が相手コートに入らないとシュートが決まっても得点を認めないというルールを適用することで、動きが活発になり、運動量を確保することができた。児童が考えたルールでは、わたしたちの体育の中にある「ラッキーゾーンコート」が特に有効であった。ラッキーゾーンが、アンダースローパスでボールを転がすことで、キックより精度の高いパスができ、また、受けやすいパスができた。ラッキーゾーンがボールを持つと、一旦プレーが途切れるので、「オフ・ザ・ボール」の動き（ディフェンスとの距離や角度を考えながらフリーになる）ができ、攻撃側のチャンスを増やすことができた。

体育専科教員の配置により、体育科の授業がTTで行えることで、よりきめ細やかな見取りができ、指導をすることができた。ボール運動では、2人で模範を示すことができ、特に有効であった。また、サッカーが専門なので、ゲーム中のコーチングの質が高く、児童がどのような動きをすればよいのか、局面に合わせて理解することができた。

わたしたちの体育に載っている指導内容の内、インサイドキック、インステップキック、スローインについては児童の実態から最低限の技術指導にとどめたが、正確なインサイドキックやインステップキックの習得には相当の時間を要すると考えられる。また、頭上から両手で投げ入れるスローインは、受け手のことを考えて足下に正確にパスすることが難しい。6年生を見越して最低限の指導としたが、来年身につかないかも知れない。反対に、それらの技術にとらわれないならば、攻守入り乱れ型のサッカー本来の楽しみが味わえるのではないかと考える。サッカーの特徴の1つとして、フィールドを転々と転がるボールは、ラインを割らない限りオンプレーである。したがって、スペースを意識した動きや、パスが可能となる。味方が誰もいないところへパスを出すのは慣れないと難しいが、受ける側の動きだしやパスを出すプレイヤーの明確なイメージがあれば、サッカーの醍醐味を味わうことができる。最終的に単元を通してそのような楽しさが味わえるように計画して実践してきたが、一瞬のタイミングを逃すとチャンスがなくなるというサッカーの難しさも感じた。サッカー経験者のいない本学級では、基礎技能を高めるため、ドリルゲームやタスクゲームに多くの時間を費やし、主ゲームの時間が少なくなってしまった。タスクゲームで学んだ技能を主ゲームで活用する時間が少なくなってしまう、授業構成を考え直す必要があると感じた。

ふり回りボードを使った授業のふり回りでは、楽しさとできばえの2つの軸に自己評価をして自分のマグネットを置き、チーム内で話し合った。児童同士が活発に話し合い、自己評価だけでなく相互評価も行うことができた。ただ、できばえをめあての達成としたが、児童はシュートが決まったり、チームが勝ったりした喜びを感じてできばえとしているようだった。最終的にめあてがどの程度達成できたか意識させることが大切だと感じた。

